

アンデス研究における理論の系譜

渡部 森哉*

本論文は、大きな理論と現場の理論の関係について、南米のアンデス研究の事例に基づき論じることを目的とする。特に、アンデス研究の中心の1つであるインカ帝国研究の理論の系譜に着目する。アンデス研究の基本は16世紀に滅ぼされたインカ帝国研究である。インカ帝国研究では、スペイン人が残した記録の分析を主とするエスノヒストリー研究と考古学的研究が主な手法となり、現在の民族誌的研究が加わる。アンデス研究からは他の地域にも応用できる大きな理論は生み出されなかった。逆にアンデス研究は、文化進化論、プロセス考古学、レヴィ＝ストロース流の構造人類学、ポラニーの影響を受けた経済人類学といった、当時の主流の理論からは距離があった。アンデス独自の理論的枠組が用いられ、アンデスの特徴が強調される傾向が強かった。ジョン・H・ロウ、R・トム・ザウデマ、ジョン・V・ムラという3人の巨匠が活躍し、多くの研究者を育てたため、その弟子筋を中心に整理することでアンデス研究の理論の流れを理解する。アンデス研究は各時代に流行した大きな理論に左右されるよりも、むしろ独自のリズムで発展してきたと言える。

キーワード

アンデス、インカ、エスノヒストリー、考古学

目次

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| I はじめに | VI 経済人類学とムラ |
| II 人類学の危機とアンデス | VII アナール学派とインカ研究 |
| III インカ帝国研究の3人の巨人 | VIII エリック・ウルフとアンデス研究の比較 |
| IV プロセス考古学とロウ | IX おわりに |
| V 構造人類学とザウデマ | |

I はじめに

人類学研究所設立70周年を記念して、人類学研究所の成り立ちを世界人類学の流れと照らし合わせて理解するためシンポジウムが2019年に企画された。それと関連させる形で共同研究のテーマが設定された。ヴィルヘルム・シュミット(1868-1954)等のウィーン学派と人類学研究所の関係を捉えるという作業は、当時の主流であった学問的潮流と、フィールドの1つ

としての日本との関係を見ることであり、まさに理論と現場の関係性の縮図を確認することであった。各時代にそれぞれのフィールドで活躍した研究者が、各自の学問的背景を有し、調査を行う。その時期に、地域を越えて知られていた理論や学問的潮流があり、それを現場に当てはめやすい場合と、逆に応用するのが難しく、むしろローカルな理論、議論の仕方が強く認められる場合がある。前者の、様々な理論的枠組みが生み出された例としてオセアニアやアマゾンなどがあ

* 南山大学

る。本論で扱うアンデス研究は後者に分類される。一般に、他地域にも援用できる汎用性のある理論が生み出されるのは高文明地帯ではなく、むしろ小規模社会なのかもしれない。

本論文は、大きな理論と現場の理論の関係について、アンデス研究の事例に基づき論じることを目的とする。特に、アンデス研究の中心の1つであるインカ帝国研究の理論の系譜に着目する。

II 人類学の危機とアンデス

ラテンアメリカの一部であるアンデスの研究が、大きな理論の流れとどのように符合するのか、あるいははずれるのであろうか。この問題を考えるために、人類学の危機という画期にアンデス研究がどう反応したのかを整理してみたい。

松田素二は、これまで3度の危機が人類学を襲ったと述べている(清水 2016: 403; 松田 2009: 12-13)。第1の危機は、1960年代末から1970年代前半にかけての「人類学と(新)植民地主義の共犯関係」を糾弾するものであった。第2の危機は、1980年代後半からのライティング・カルチャー・ショックと呼ばれるものである(松田 2009: 12-13, 285, 293)。それは、調査者が他者を表象する過程における権力作用を明示化し、問題化した。そのためフィールドワークの不可能性という議論をも生み出した。第3の危機は、現代世界と現代人類学をとりまく状況の急激な変化に適切に応えられないことであるという。こうした枠組に照らし合わせ、3つの危機の時期にアンデス研究にはどのような変化があったのかをみてみたい。

まず、第1の危機についてである。アンデス研究者の間では、人類学と植民地主義の関係が表立って議論されることは少なかった。それは、中南米諸国が19世紀初めにスペインから独立して、それぞれ国として力を持っていたことが理由の1つである。この点が国としての仕組みが脆弱なアフリカ諸国等とは異なる。イギリスやフランスの事例と比較してみると、宗主国スペインと中南米諸国との関係を上下関係として見ることは不適切である。スペイン人研究者が旧植民地で特権的に調査を実施したということもない。例えば、

考古学の発掘調査について見てみると、ヨーロッパ諸国のうちイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー、ポーランドなどの調査隊はペルーで発掘調査を積極的に実施してきたが、スペインの調査隊によるプロジェクトは極端に少ない。これはスペインの国力自体が低下したことにもよるが、中南米諸国の独立の歴史的経緯からも理解できる。独立を主導したのが新世界のアメリカ大陸生まれのヨーロッパ系の人々であったから、宗主国と旧植民地諸国との関係を、ヨーロッパ系と先住民系との関係として読み解く枠組を当てはめるのは適切ではない。現在でも中南米の人々はスペイン人をガチュピンとよび揶揄するなど、スペイン人との間に距離がある。イギリスやフランスの宗主国とその旧植民地諸国との間で生じたような政治的力学、その学問上の影響関係は、スペインとペルーをはじめとするラテンアメリカ諸国との間には当てはまらない。中南米諸国には確固たる知的伝統が形成され、学問的にスペインの影響下にあったわけではないのである。ペルーでは研究者と現地の人々との政治的関係性が植民地主義という形で問題となるとすれば、それは国内の問題であった。

中南米研究の中心となったのは、旧宗主国スペインではなく、陸続きであるアメリカ合衆国である。ただし後述するように、アメリカ合衆国が研究の中心であることは疑いないが、アンデス研究のスタイルについて考えてみると、アメリカ合衆国の人類学の主流とは異なる手法を採用する研究者が多い。

2つ目の危機は、ライティング・カルチャー・ショックと呼べる、ジェームス・クリフォード等からの問題提起に起因する動きである(クリフォード & マーカス編 1996 [1986])。『文化を書く』は反本質主義的ポストモダン人類学のマニフェストとされる(松田 2009: 126)。それはオリエンタリズム、本質主義批判に接合する(サイード 1993 [1978])。この時期にアンデス研究においてどのように問題が受けとめられたのであろうか。この時期、アンデス研究においては逆の方向性に進んでいったと思われる。つまり「アンデス性¹」が前面に出され、アンデス文化の本質主義的な記述がむしろ強調されたままであった。その理由の1つは、研究の起点が過去に設定されていたことにある

1 スペイン語で「ロ・アンディーノ (lo andino)」と呼ばれる(渡部 2017)。この言葉はジョン・V・ムラの造語であるという(Lane 2022: 21)。

であろう²。アンデス先住民性を議論する際、その起点は先スペイン期に置かれる。現代を対象とするとしても、アンデス研究の基本はインカ研究となる。15世紀から16世紀に栄えスペインに征服されたインカ帝国という過去の社会を対象とするがゆえ、彼らとの関係性が直接問題となることはない。

アメリカ合衆国の人類学で用いられる「文化領域 (Culture Area)」という概念(ボアズの弟子のクラーク・ウィスラーが出し、クローバーが広めた)は、基本的に共時的な枠組みである。それはウィーン学派の「文化圏 (Kulturkreis)」という概念と異なり、歴史性を表立っては議論しない。そして文化領域の基準となる時期は、ヨーロッパとの接触時である15世紀終わりから16世紀初めの時点である。一般的法則を求めようとするのが、アメリカ人類学の1つの特徴であり、その例として、文化進化論や、その流れを汲むプロセス考古学などがある。つまり本質主義的な捉え方をするのは、アメリカ人類学の1つの特徴であったとも言える。そのアメリカ合衆国で『文化を書く』を嚆矢とする本質主義批判の流れが出てきたことは、ある意味で逆説的である。

本質主義批判は、例えば人類の普遍性を見るよりも、文化の多様性に着目するといった方法と親和性が高い。従来のエティックなアプローチよりも、当事者の声を聞くエミク的なアプローチが望ましい、といった方向性が重視されると理解すれば、アンデスでは当事者の声はインカ帝国に求められるのであるから直接聞かれることはなかったのである。

第3の危機は、人類学というディシプリンの存在意義に関わる問題である。しかしアンデス研究では、そもそも人類学が現代社会にどのように結びつくかという問題提起がなされにくかった。それはアンデスの人類学研究が歴史学に寄っているためである。歴史学が現代社会にどのように役立つかという問題提起はあるとしても、そもそも歴史学が役に立つかどうかは問われることは少ない。それと同様に、アンデスで人類学の存在意義がやり玉に挙がることはなかった。アンデスの人類学の特徴の1つは、歴史学と結びついたエスノヒストリーという分野が発達しているということであり、現代の民族誌的研究と両輪を成している。エスノヒストリーとは人類学と歴史学の混成の分野で³、植

民地化された文字を持たない人々の歴史について、外部の人々が残した史料を基に行う研究を指す (van Deussen 2000)。そのため、アンデス研究は過去と現在を対象とし、長期的な視点で捉えるという性格が強い。

以上のように、アンデス研究は人類学の世界的流れとは連動せずに独自のリズムで発達してきたように見える。次節以降、アメリカ合衆国を中心としたインカ帝国研究の流れをまとめる。インカ帝国期よりも古い時代のアンデス考古学研究、アメリカ合衆国以外の地域におけるアンデス研究の流れについては、インカ帝国研究と関連付けて補足的に説明するにとどめる。

III インカ帝国研究の3人の巨人

アンデス研究者の多くはアメリカ合衆国で教育を受ける。先述のようにアンデス研究の1つの軸はインカ帝国研究である。アンデス考古学を専門とする場合、先インカ期の社会の解釈のためにインカがモデルとして採用され、逆に現代の先住民社会のことを調査する際にも、インカ帝国が参照枠となる。インカ帝国研究では、考古学とエスノヒストリーが主要な研究手法であり、それに民族誌的な研究、言語学的な研究が加わる。

アメリカにおけるインカ帝国研究者には3人の重鎮がいた。3人の研究の特徴、その弟子筋を整理することで、アンデス研究の流れを見てみたい。3人の重鎮とは、アメリカ合衆国メイン州生まれアメリカ育ちのジョン・H・ロウ (John H. Rowe, 1918-2004)、オランダ生まれオランダ育ちのR・トム・ザウデマ (R. Tom Zuidema, 1927-2016)、そしてウクライナ生まれルーマニア育ちでアメリカに移住したジョン・V・ムラ (John V. Murra, 1916-2006) である。3人はそれぞれインカ帝国を中心に研究したが、先スペイン期や植民地時代、現代まで研究の射程を伸ばした。現在のアンデス研究者の多くが、カリフォルニア大学バークリー校のロウ、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で教鞭をとったザウデマ、そしてコーネル大学で教えたムラの弟子である。

ロウは考古学に軸足を置きながら、歴史文書も分析し、人類学的議論を行う、ある意味アメリカ流の総合人類学を体現した人であった (Rowe 1946, 1957, 2003)。

2 例えば、ジューン・ナッシュ (Nash 1979) はポリビアの事例を扱い、その解釈の枠組に先スペイン期を組み込んでいる。

3 アフリカ研究では用いられない (Murra & Rowe 1984: 642)。

しかし一般法則を求める考古学ではなく、むしろ歴史性を重んじた。つまりアメリカ考古学の主流の方法を追求したわけではない。ロウの下では20名以上が博士論文を提出した。エドワード・ランニング (1930-1985)、トマス・パターソン (1937-)、クリストファー・ドナン (1940-)、キャロル・マッキー (1933-)、キャサリン・ジュリアン (1950-2011)、スーザン・ナイルズ (1980年に博士号取得)、リチャード・バーガー (1950-) など多くの研究者がロウから薫陶を受けた。バーガーはアンデス形成期研究の専門家であるが、プロセス考古学的な議論よりも個別的な記述を好み、ロウのスタイルに類似していることが分かる。結局はけんか別れをしたが、ドナンの弟子であったルイス・ハイメ・カスティージョ (1963-) が、ペルーで多くの学生を育てている。

ザウデマは、オランダで教育を受け、アメリカで教鞭を執った (Zuidema 1964, 1989, 2011, 2015)。ザウデマの弟子にはゲイリー・アトソン (1946-)、ビリー・ジーン・イズベル (1937-)、ジョン・アールズ (1934-)、キャサリン・アレン (1947-) などがいる (Allen 2021: 292)。直接の指導学生ではないが、同じイリノイ大学にいたドナルド・レイスラップ (1927-1990) の学生で、ザウデマにも近かったウィリアム・イズベル (1943-) はニューヨーク州立大学で教鞭を執り、その弟子も多く (タマラ・ブライ、パトリア・ノブブロック、アニータ・クックなど)、その初期の教え子であるキャサリーナ・シュライバー (1978年に博士号取得) は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校でジャスティン・ジェニングス (2002年に博士号)、など多くの研究者を育てた。

ムラはアメリカのシカゴ大学で博士号を取得したが、イギリス人類学の影響を多く受けている (Murra 1975, 2002 [1975])。コーネル大学のムラの弟子にはフランク・サロモン (1946-)、ロレーナ・アドルノ (1974年に博士号)、エンリケ・メイヤー (1944-) などがいる。さらにサロモンの弟子スティーヴン・ウィンキー (2003年に博士号)、エドゥアルド・コーン (1968-) など、孫弟子、ひ孫弟子に連なる。また島田泉 (1948-) も学部時代はコーネル大学でムラの授業を受けていた (島田・小野 1994)。

以上がインカ帝国研究のビッグ・スリーの概要である。次節以降3人の学問の特徴を検討するが、その前に、彼ら以外のアンデス考古学研究の流れについても概観したい。

ハーバード大学のゴードン・ウィリー (1913-2002) はインカ研究に限定せず、多くの時代を扱う研究者を輩出した。研究の核の1つがペルー北海岸研究であり、はじめはブルー谷において組織的な調査を実施した (Willey 1953)。その後、マイケル・モーズリー (1941-; 学部はバークリー、修士と博士はハーバード) とケント・デイ (1932-) が率いた、チムー王国 (後900-1450年) 研究に焦点を当てたチャンチャン=モチエ谷プロジェクト (1969-1974) に参加した多くの研究者が、ハーバード大学に博士論文を提出した (Moseley & Day [eds.] 1982)。その1人アラン・コラタ (1951-) がその後所属したシカゴ大学では、チャールズ・スタニッシュ (1956-)、ブライアン・パウアー (1990年に学位取得)、ジョン・ジャヌセック (1963-2019; 1994年に学位取得)、エドワード・スウェンソン (2004年に学位取得) などが学び、アンデス研究の新しい流れを生み出していった。またモーズリーが先鞭をつけたペルー南部のオスモレ谷の調査に多くの研究者が参加し博士論文を提出した (Rice, Stanish, & Scarr [eds.] 1989)。

もう1つの大きなグループはティモシー・アール (1946-) が教鞭を執ったカリフォルニア大学ロサンゼルス校に所属していた人々である。そこでペルー中部高地マントーロ谷におけるプロジェクトに参加し、多くの研究者が学位を取った (D'Altroy & Hastorf [eds.] 2001)。その1人テレンス・ダルトロイ (1981年に博士号) がコロンビア大学で教えている。アールはインカ帝国研究も視野に入れていたが、むしろ首長制社会の研究に重点を移した (Earle 1997)。

テキサス大学におけるリチャード・シャデール (1920-2005; ウェンデル・ベネット 1905-1953の弟子) の弟子たちがもう1つの流れである (Dillehay 2007)。シャデールは修士課程をシカゴ大学で学んでおり、そこでムラと仲良くなった。トム・ディルヘイ (1976年に博士号取得)、ヘレイン・シルヴァーマン (1952-) などの弟子がいる。

レズリー・ホワイト (1900-1975) が教鞭を執り、その後も彼の流れを汲むプロセス考古学の牙城、ミシガン大学はどうであったのだろうか。ケント・フラナリー (1934-)、ジョイス・マーカス (1948-) といった大御所はメソアメリカをフィールドとしていたが、アンデス研究にも携わった (Marcus 1987)。インカ研究では、ミシガン大学で学位を取ったアラン・コウヴィー (1974-) が活躍している。ペルー人のホルヘ・

シルバ (1996年に博士号取得) がミシガン大学で学位を取った。アンデスでもプロセス考古学的なセトルメント・パターン研究が軸となっている。

ペルーでは、フランクリン・ピース (1939-1999)、マリア・ロストウォロフスキ (1915-2016)、ワルデマル・エスピノサ・ソリアノ (1936-) といった歴史学者、そしてフリオ・テーヨ (1880-1947)、ルイス・バルカルセル (1891-1987) を初めとする考古学者が活躍した。一方で現在の民族学的研究を行う研究者には、大きなプロジェクトを組織する権力を持つ者はいない。著名な人類学者として、ルイス・ミリョーネス (1940-) などが知られるが、彼も元々は史料研究を行っていた。フィールドワークを行う民族誌的研究はそれと比べると少ない。それはやはりインカ研究が主だからである。ミリョーネスは日本の民族学者の友枝啓泰 (1935-2009) や加藤隆浩 (1952-) の共同研究者である。ちなみにペルーでは、ヨーロッパ式の教育システムが採用されており、歴史学と考古学が一緒になっており、人類学は社会学と同じ学部属している。

日本におけるアンデス研究は考古学研究が盛んで特に形成期を専門とする研究者が多い。個別記述的な研究が中心であり、実証性を重んじ理論的な議論をあまりしないと評価される (Kaulicke 2010)。インカ帝国研究では、増田義郎 (1928-2016) が多くのクロニカを翻訳し、エスノヒストリー研究を中心に発達してきた。1985年に出版された『アンデスの環境と文明』 (Masuda, Shimada, & Morris [eds.] 1985) は、ムラのモデルに準拠した論文集であるため、3人の中ではムラの影響が日本に一番強く認められると良い。特に、後述する垂直統御を巡る研究には考古学、民族学を専門とする研究者が取り組んだ (大貫 1978; 山本 1980)。

IV プロセス考古学とロウ

ロウが学んだハーバード、そして奉職したカリフォルニア大学バークレー校は、長らくアンデス研究の拠点であった。ロウはアンデス研究所を設立し、自身が編集長を務めた雑誌『ニャウパ・パチャ (Ñawpa Pacha)』は1963年から刊行が始まった。これは現在でもアンデス考古学研究の基本となる雑誌の1つであ

る。

ロウは、文化進化論や伝播という考えに共感しなかったし、彼のキャリアはプロセス考古学の発展と並行していたのであるが、その影響は殆どなかった⁴ (Burger 2007: 39-40; Schreiber 2006: 198)。あくまで機能的にデータを積み重ねる方法にこだわり、法則定立を目指さなかった。歴史的に理解しようとする姿勢をとったという意味で、日本の考古学や人類学と類似しているであろう。ロウの研究スタイルは総合人類学であり、言語学的な論文、歴史学の論文もある (Burger 2007; Julien 2007; Schreiber 2006)。

ロウはアルフレッド・クローバー (1876-1960) のいるカリフォルニア大学バークレー校で学位を取ろうとしたが、家庭の事情でハーバード大学のアルフレッド・キダー二世 (1885-1963) のもとで学位を取得した。しかしフランツ・ボアズ (1858-1942) の影響を受けたクローバーとの学問的關係がより近く、その後1948年から1988年までロウ自身がバークレー校に奉職することになった。その前にはパリ大学 (1945-46年) でマルセル・モース (1872-1950) と一緒に学んだそうだが (Burger 2007: 35)、その影響があるかどうかは不明である。英語、スペイン語、ラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語に堪能で、ピエール・デュヴィオル (1928-) は、ロウがフランス語とドイツ語に堪能であったことを回顧している (Itier & Guibovich Pérez 2018: 164)。

1948年から1988年まで、カリフォルニア大学バークレー校で何人もの弟子を育てた。ロウの研究スタイルは個別記述的であり、また帰納的であった。演繹的な議論を嫌ったため、大きな理論を生み出すことには繋がらず、その結果、アンデス研究者の外側にはその影響は限定的であったであろう。ロウはジャーゴンを避け、アメリカ考古学の主流であるプロセス考古学を嫌っていた。その代わりに歴史的な説明を重んじた。また、発掘調査も多くは行わず、歴史史料の分析に重きを置いた。また重要なことは、英語だけではなくスペイン語の論文を多く発表したということである。そのためクスコをはじめとするペルーでは影響力が大きい。クスコの考古学はロウが述べたことを追認する形が多い (Zapata 2012 私信)。考古学の論文に関しては、学部の時に古典考古学を学んだため、ハーバード大学

⁴ しかしながらシュレイバーが指摘するように、「段階 (stages)」は決まった順序で経過するということを想定しており、文化進化論と類似する (Schreiber 2006: 198)。

で学んだタイプ・バラエティーという分析方法には不満であり、それを応用してクスコの土器を分析したために失敗したと後悔したという (Burger 2007: 34; Schreiber 2006: 197)。彼の共同研究者ローレンス・ドーソンはナスカの土器 (Rowe & Lyon 2010)、ドロシー・メンゼルはワリ期の土器 (Menzel 1964) の編年を組み立てたのであるが、それらは法則を当てはめるのではなく、個別観察を積み上げるセリエーションであった (Rowe 1961)。同時にロウは放射性炭素年代を重視した。また、クローバーの影響を受けていたためか、文化領域としてのアンデスをかなり本質的に捉えた。植民地時代における変容も扱ってはいたが、いわば地域研究としての枠組が強く、人類の普遍的な特徴を追求する方向には向かわなかった。カウリケはロウの学風を北米歴史主義 (North American historicism) と説明する (カウリケ 2012: 305)。

以上をまとめると、ロウが主導するアンデス研究は、アメリカに中心がありながら、文化進化論やプロセス考古学など当時のアメリカ人類学の主流の中にあっただけではなかった。ロウの下で学んだ研究者は、それぞれ影響力のある研究を生み出し、そして弟子を育てていったがデータ重視の姿勢は変わらない。

ロウのアンデス研究は歴史性を重んじ、一般法則化を嫌い、アンデスの独自性を強調する傾向が強かった。一方、シカゴ大学のコラタの下で学位を取ったスタンニッシュ (Stanish 2003)、パウアー (Bauer 1992)、ミシガン大学で学位を取ったコウヴィー⁵ (Covey 2006) の研究はプロセス考古学の枠組が強く、彼らがジョン・ロウとは別の潮流の研究者であることが明瞭である。ロウの研究スタイルは個別記述的であるのに対し、現在ではプロセス考古学的手法を採用する研究者が多くなってきた。ロウはプロセス考古学的手法に懐疑的であったが (Burger 2007: 37)、その反動が生まれてきたとも言えよう。特にロウの影響は首都クスコで強かったため、インカ研究がロウの呪縛から解放されつつあると表現することもできよう。

V 構造人類学とザウデマ

ザウデマの研究を、クロード・レヴィ＝ストロースと対比しながら説明したい。

レヴィ＝ストロースの南米研究はアマゾンを中心としている。『神話論理』がブラジルのポロロ族の神話を基準神話として始まっていることはよく知られている。そしてこのレヴィ＝ストロースの方法論を、フランスのアフリカ研究者がアフリカ社会に当てはめようとしてことごとく失敗したことを川田順造が述べている (川田 2010: 46, 2017: 31)。南山大学の坂井信三も失敗したそうである (坂井 2006私信)。対象としたアフリカ社会には独特の癖があるため、レヴィ＝ストロースの方法を援用しにくいということである。

ではアマゾンの隣、アンデスはどうかだろうか。実はレヴィ＝ストロースの影響は限定的である。レヴィ＝ストロース自身がどのようにアンデスを扱ったのかというと、非常に断片的に資料を引用するのみで、体系的な分析はしていない。ティアワナコ遺跡の空間構造、ワロチリ神話などを分析対象として取り上げるものの (レヴィ＝ストロース 1972 [1956])、あくまで副次的な扱いである。レヴィ＝ストロースはアンデスという山には登らなかった、と表現することもできよう。

アンデスの社会は、無文字社会ではあるが、王国、国家社会のような複雑な社会も成立した。レヴィ＝ストロースの方法を用いた分析が応用された研究はアンデスではあまり行われなかった。先述のようにアフリカの諸社会には適用できなかったことから、レヴィ＝ストロース流の構造分析は、複雑な社会には応用しにくいという一般的な傾向を指摘できるであろう。レヴィ＝ストロースの熱い社会と冷たい社会という分類に従えば、熱い社会がアンデスで、冷たい社会がアマゾンなのである (レヴィ＝ストロース 1970 [1965]: 220)。構造と歴史を対置する枠組みを用いれば、アマゾンと比較して歴史的な部分が強くなった社会がアンデスと言えよう。

ところが一方で、やはり無文字社会であるアンデスには構造分析が有効であるということも指摘できる。歌などはメロディーなどの枠組みがあつてこそ繰り返し歌うことができる。それはオングの『声の文化と文字の文化』で論じられているとおりである (オング 1991 [1982])。それではなぜアンデスではレヴィ＝ストロースの方法があまり援用されないのか。あるいは失敗したのか。これには大きく2つの理由が考えら

⁵ コウヴィーがクスコで調査をする際に、ロウの2人目の妻であるパトリシア・ライアンはその手法を全く評価していなかったという (Zapata 2012私信)。

れる。

1つ目は、レヴィ＝ストロースの究極的に2項対立に還元してしまう方法が、より複雑な社会には当てはめにくいということである。逆に説明すると、複雑な社会の構造はより複雑であるから、2項対立よりもっと複雑な構造を想定しなければならない(渡部2010)。アンデス研究者に多く引用されているレヴィ＝ストロースの論文は『双分組織は存在するか?』であり、それは究極的には、2項対立以上のより複雑な構造を予見したものである(レヴィ＝ストロース1972 [1956])。

2つ目は、フランス構造主義とは別の流れがアンデス研究では主流であったということである。それはオランダ構造主義である。その主導者トム・ザウデマは、J・P・B・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング(1886-1964)とP・E・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング(1922-1999)の弟子であった。当初はインドネシア研究を志したが、現地調査ができなくなったために1949年にアンデス研究に転向した。方法論的には、フランス構造主義とオランダ構造主義の間に大きな違いはない。アートンによれば、違いは(1)オランダ構造主義が歴史の研究に重点を置いていること、(2)フランス構造主義が構造を無意識に還元すること、である(Urton 1996: 1; cf. Allen 2021: 291)。ザウデマも、人々が意識的に構造を継承してきたと考えたようである(Nowack 1998: 240)。

『オランダ構造人類学』の訳者が述べているように、レヴィ＝ストロースとオランダ構造人類学の違いは、「民族学的研究領域」の概念、つまり限定された領域内での比較というより禁欲的な立場、そして「文化構成員の内なる視点」の強調である(宮崎・遠藤・郷1987: 485)。またライデン学派では、「当事者によって表わされた表象のレベルに関わる研究がまず重視されてきた」(宮崎・遠藤・郷1987: 478)。包括的分類体系への強い関心も、オランダ構造主義の特徴である。社会組織と宗教的対応関係が強調され、全体的分類体系が希求された(宮崎1984)。アンデス研究において、いわゆる構造主義批判、ポスト構造主義の議論が盛り上がりなかつたのは、具体的な社会構造の研究が中心であったからとも言える。

レヴィ＝ストロース自身はオランダの研究者を初

の構造主義者と認定し、「インドネシアの人々自身がすでにして構造主義者であったから」(レヴィ＝ストロース1979: 33)と述べている。同様に、アンデスの人々も構造主義者であったと考えたくなる。それはインドネシアの人々が社会を構造としてイメージしていたことと同じである(宮崎・遠藤・郷1987: 484)。レヴィ＝ストロースの方法とザウデマの方法の違いといえば、分析の対象と、その分析の繋げ方である。レヴィ＝ストロースの分析はポロロ神話を基準としながら地域を横断していくが、基本的にはアメリカ大陸の小規模な無文字社会であり、メソアメリカとアンデスという文明地帯を避けている。そして神話分析を中心とし、語られる内容として頭の中にあるものを対象とする。アンデスにおけるオランダ流の構造分析はインカという非常に複雑な社会を対象とし、空間構造、図像、王権構造など具体的な社会の仕組みに関することに切り込む。そうした分析は基本的にアンデスの範囲にとどまる⁶。

レヴィ＝ストロースの神話分析はアメリカ大陸の小規模社会を基本的に対象として扱う。そして神話のみならず、空間分析も行う。物質文化の仮面の分析も行う。しかしいずれも二項対立に還元しようとする。社会組織、宗教的対応関係の考察が主ではない。

まとめると、構造分析の方法の奇妙な併存、あるいは棲み分けと言える状況が南米には認められる。アンデスでは結局、アンデス独自の構造分析が行われたといつて良い。それは、より具体的に述べれば、ザウデマとその影響を受けた者たちに限定される研究である。オランダ構造主義が、インドネシアという1つの文化の範囲内での分析に固執したことと整合性がある。

さらに、ザウデマはインカの双分王朝説の提唱者と位置づけられており、ロウ、そしてその弟子たちに痛烈に批判されている(Julien 2000; Rowe 1994)。また、双分王朝説を発展的に継承したピエール・デュヴィオルも、ザウデマの手法を強烈に批判することになった(Duviols 1997a, 1997b; Itier & Guibovich Pérez 2018: 163; Zuidema 1997a, 1997b)。

⁶ ただしザウデマは、インカの分析のためにポロロの空間構造も参照している。

VI 経済人類学とムラ

次に大きな理論として、カール・ポラニー（1886–1964）の経済人類学モデルを取り上げよう。『大転換』（ポラニー 1975 [1944/1957]）によって知られているように、ポラニーは市場経済と互酬、再分配の概念を体系化した。その考え方は多くの地域に応用された。特に貨幣経済が発達しなかった社会の経済活動を説明するために、互酬と再分配がキーワードとして用いられた。

ムラによれば、先スペイン期アンデスのインカ帝国も貨幣のない、市場のない社会であった。そしてムラはその経済の仕組みを、他の市場経済の発達しない社会と同様に、「互酬」と「再分配」という概念を用いて説明した。しかしムラは、ポラニーの名前をほぼ引用しない。それはムラによれば、ポラニーからは独立して、彼自身が互酬と再分配という考えにたどり着いたからである（Castro et al. [eds.] 2000: 93）。次に、ムラの知的背景をまとめてみたい⁷（Castro et al. [eds.] 2000; Harris 2007; Murra & Rowe 1984; Salomon 2007）。

ウクライナのオデッサでユダヤ系の家庭に生まれた Isak Lipschitz という名前の人物が後にアンデス研究を牽引することになる（Curatola Petrocchi 2019: 17, nota 11; Harris 2007: 164）。生後、彼はルーマニアのブカレストで育ち、ナチスを逃れアメリカに亡命し、John Victor Murra⁸と改名し、アンデス研究に大きな足跡を残した。シカゴ大学で学び博士号を取得した。その当時受けた教育では、アメリカの文化人類学というよりは、イギリスのアルフレッド・ラドクリフ＝ブラウン（1881–1955）の影響を受けている。ラドクリフ＝ブラウンがシカゴ大学にいたのは1931年から1935年までの短い期間であり⁹、ムラが学んだ時期とちょうど重なっている。ムラがインカ帝国を記述する際に依拠したのは、イギリスの人類学者の残したアフリカの民族誌である。ムラによれば、アメリカ合衆国において、イギリス人、ベルギー人が書いたアフリカに関する民族誌を読みこんだ、最初の世代である（Castro et al. [eds.] 2000: 67）。ムラはエバンス＝プリチャード、フォーテス、グラックマンなどが書いた民族誌を読み

あさった。そして、アフリカ研究の動向を注視し続けた。また第二次世界大戦中はルース・ベネディクト（1887–1948）と働いたという。

そして教育においても、アメリカ流の文化人類学ではなく、イギリス流の人類学を学ぶことを強く勧めた。例えばフィンランドのマルッティ・ペルシネン（1956–）には、イギリス式の教育を行うロチェスター大学で学ぶことを勧めた。ペルシネンはそこで修士号を取得した（Castro et al. [eds.] 2000）。後に一世を風靡した垂直統御論を提唱したのが、ロチェスター大学の講演においてであったことは示唆的である（Murra 2017 [1969]; 島田・小野 1994: 40–41）。その後ペルシネンはフィンランドのトゥルク大学で博士号を取得したが、その時の審査委員の1人がムラである（Pärssinen 1992）。ペーター・カウリケ（1946–）はムラの学風を機能主義と表すが、まさにラドクリフ＝ブラウン流である（カウリケ 2012: 305）。

先述のようにムラはポラニーと同時期に同じような考え方に達したという。ポラニーの「再分配」という考えを聴いたことが唯一の借用であり、それ以外は独自にたどり着いたという（Castro et al. [eds.] 2000: 93）。実際1951年にポラニーが「再分配」という考えをインカ帝国に当てはめることを提案した講演をムラは聴いている（Wachtel 1981: 38–39）。ともかく、ムラはその後めざましい功績を残したため、アンデス研究ではムラの名が多くを挙げられるようになった。1955年に博士論文を提出し1956年に学位を取得したが、その博士論文の中で互酬と再分配という枠組が提示されている。しかし1980年まで公刊されなかったこともあり（Murra 1980 [1956]）、ポラニーとは異なり、ムラのモデルは基本的にはアンデス研究の枠組みの中でのみ議論されている。

ムラは1972年に「垂直統御」というモデルを提示した（Murra 1972）。それがムラの名をさらに知らしめる要因となった。そのモデルは、次のようにまとめられる。アンデスでは狭い範囲に高度によって多様な環境が密集する。人々はそれらの環境を多角的に利用することによって自給自足を図る。そしてインカを事例とした垂直統御というモデルを検証するために、考

7 チリの雑誌『チュンガラ』の42巻1号（2010年）では特集が生まれ23本の追悼文が掲載されている。

8 幼少時のあだ名である Mura に由来する。クロイチゴを意味するルーマニア語で、黒い瞳であったためそのように呼ばれていたという（Salomon 2007: 793）。

9 その間に指導した学生の1人がロバート・レッドフィールドである。

古学的研究、民族学的研究が進んだ（大貫 1978; 山本 1980）。

ムラのモデルは、貨幣や市場の発達しなかったアンデスにおける経済の仕組みを的確に言い表した。インカ王は再分配経済で、民衆は互酬制と自給自足経済で成り立っていた。そしてムラはアンデス性 (Lo Andino) を強調し、個別記述にこだわったと評価できる。ムラの友人であるエリック・ウルフ (1923-1999)、シドニー・ミンツ (1922-2015) などは (Salomon 2007: 793)、専門とするフィールドの研究者以外にもよく知られているが、肝心のムラはアンデス研究者以外にはそれほど引用されていない。現在では互酬と再分配で本当にインカ帝国のような巨大な国家が維持されていたのか、市場経済も機能していたのではないかという疑問もある (Hirth & Pillsbury 2013)。

またムラについては、インカの双分王朝説も検討したようであるが、それはアフリカをモデルとしたものであった。東アフリカには2人の王がいるという事例を引用しているが (Castro et al. [eds.] 2000: 67, 97)、あくまでモデルとして言及しているのみである。そのためクロニカの記述に依拠した、ザウデマ、デュヴィオルの双分王朝モデルとは系譜が異なる。

このムラの弟子には、先述のようにサロモン、アドルノ、メイヤーらがいる。しかし、決して弟子は多くはなかった。それはかなり特異な人物であったかららしい。2回結婚して2回離婚し、子どもはいなかった。ムラは、マリノフスキーの弟子にイギリス人の男がおらず、女性やユダヤ系が多かったことをわざわざ語っているが、自分がユダヤ系だったからかもしれない (Curatola 2019: 17)。

以上のように、インカ研究の3人の重鎮は、いずれも活躍した当時にはやっていた大理論と距離があった。文化進化論やその流れを汲むプロセス考古学に共感しなかったロウ、主流のフランス構造人類学とは異なるオランダ構造人類学のアンデスにおける旗手ザウデマ、経済人類学のボラニーの大理論を直接援用せずアンデスの特殊性を追求したムラ。彼らが説明に用いたのはいずれも現場の理論であるが、大理論との距離、関係性の中で立ち位置が決まっていた。決して大理論を応用しようとした結果として地域性が出てきたわけではなく、アンデスの特殊性を説明するために試行錯誤した結果、大理論と類似はしているが違った結果となったと説明した方がよいであろう。

続く2つの節では、補足的な説明をする。第7節ではザウデマとフランスにおけるアンデス研究の関係を理解するため、アナール学派について見る。第8節ではムラの研究の特徴を理解するため、彼の友人のエリック・ウルフ (1923-1999) と比較してみたい。

VII アナール学派とインカ研究

インカ帝国の3人の重鎮には、ヨーロッパの影響が大きいという話をした。もう1つそれに付け加える話がある。フランスのアナール学派についてである。それは従来の権力者中心の歴史の再構成ではなく、民衆に着目した社会史研究を重視する流れである。これは正確に言えば、歴史学の分野ではじまった潮流であるが、インカのエスノヒストリー研究に影響を与えた。

その主役となったのは、ナタン・ワシュテル (1935-) という人類学者である。1971年に30代半ばに出版した『敗者の想像力』(ワシュテル 1984 [1971]) 以来、刺激的な作品を送り出してきた。先住民が一方向的に搾取される対象ではなく、植民地支配の中で主体的に動いた人々として描いた作品であり、メキシコのミゲル・レオン＝ポルティーリャ (1926-2019) の『インディオの挽歌』(1994 [1959/1984]) の枠組みを踏襲している。ワシュテルの本の原著のタイトルは『La vision des vaincus』であり、レオン＝ポルティーリャの原著名は『Visión de los vencidos』であり、ほぼ同じである。ただしレオン＝ポルティーリャは、彼に断りなく同様のタイトルをワシュテルが使用したことに対して立腹していたという (Itier & Guibovich Pérez 2018: 167)。またワシュテルは「アタワルパの悲劇」というケチュア語の劇を重要な資料としているが、それを収集したというホルヘ・ララの創作であるとデュヴィオルは語っている。フランス国内のアンデス研究者の間に複雑な対立関係があるようなのであるが、史料批判に基づくアンデス研究が発達したことは確かである。

フランスにおけるアンデス研究には、2つの大きな流れがある。1つは石器研究、もう1つはエスノヒストリー研究であり、後者の旗手がナタン・ワシュテルである。彼の作品は、「脱構造」をキーワードとして用いている。それはデリダのいう脱構築とは異なる考え方であり、先スペイン期の社会構造が植民地期に変容していく様相を表現している。そしてアンデス研究で有名なもう1人の人物がデュヴィオルである。植民地時代の宗教が主な専門ではあるが (Duviols 1977

[1971]; 斎藤 2004)、インカの双分王朝説を發展させた人物として名高い (Duviols 1979, 1980)。

先にレヴィ＝ストロースのアンデス研究における影響は限定的であることを述べた。インカという複雑な社会を対象とするため、レヴィ＝ストロースの方法論を応用しにくいということ、オランダ構造主義の方法が表に出てきたことを理由として挙げた。そこでフランス国内におけるレヴィ＝ストロースとアナール学派の関係を検討する必要があるが、少なくともアンデス研究ではアナール学派の影響の方が顕著に認められる。

広大な植民地を有したフランスやイギリスの人類学や考古学では、やはりアフリカ研究が中心であり、アンデス研究は周縁的である。イギリス人のプロジェクトは単発であり、組織的ではない。広大な旧植民地を有する国にとって、その他の国の研究は優先順位が低いのであろう。

VIII エリック・ウルフとアンデス研究の比較

『震える大地の子供たち』(Wolf 1959) はウルフの代表的な著作である。ウルフといえば、ポリティカル・エコノミー論などで名を馳せ、彼の「閉鎖的共同体」論がよく引用される研究者である (ウルフ 1982 [1957])。

さて、彼の調査地はメキシコであるが、様々な点で中米と南米の間には平行性が認められる。アンデスは、一言で説明すればローカル化が極度に進んだフィールドである。アンデスの独自性をロ・アンディーノと呼び、それを古くに遡らせる。それはウルフがメキシコの伝統を表した方法と類似している。当然ながらウルフのモデルは多くの批判を浴びた。要するに閉鎖的な共同体はなく、様々な関係性の網の目の中にあるということ、そして文化的な連続性は担保されないという批判である。人類学では『創られた伝統』(ホブズボウム & レンジャー編 1992 [1983]) のように、近代という文脈の中でいかにローカルな文化が伝統化しているか、という議論の仕方が流行した。アメリカ大陸でもそのような伝統化の現象は、20世紀から見られる。例えばペルーにおけるインカ帝国期の祭りインティ・ライミの復活などである。ところが、近代という脈絡における伝統の創造という形ではなく、先スペイン期からの連続性を想定する研究が多い。周りの環境によって変化するのは当然であるが、あくまで志向性と

して、閉鎖的になるという特徴は認められる事例がある。ウルフの閉鎖的共同体モデルを評価できるのではないか。これはアンデスでも同様であり、アンデスの特徴を議論することと裏表の関係にあろう。

ウルフの『ヨーロッパと歴史なき人々』(Wolf 1982) も有名であるが、文化面の考察が弱いと批判された (マーカス & フィッシャー 1989 [1986]: 164)。アメリカ人類学で用いられる文化領域という考え方は、ヨーロッパ人が侵入した15-16世紀を基準とした区分であり、基本的に歴史性を重視しない共時的な枠組みである。歴史を重んじるヨーロッパの人々から見たら、アメリカは「歴史のない」という意味で一段低く見られていたのである。共時的に見る一方で、ある時点での特徴をできるだけ過去に遡らせようとするため、変化を中心的に議論するわけではない。記録のある時代からスタートして過去を遡及的に再構成する直接歴史的接近法という方法も、連続性を前提とした方法である (ウィリー & サプロフ 1979 [1974]: 170)。

IX おわりに

アンデス研究の理論的な流れを概観するという本論の目的に即して、最後に今後の課題について述べておきたい。

まず現在盛んに議論されている存在論的研究についてである (綾部 2018; Alberti 2016; 春日 2011; Kohn 2015)。特に、南米のアマゾン研究における存在論的展開とアンデス研究の関係を整理することが必要であろう。南米ではブラジルのヴィヴェイロス・デ・カストロ (2015 [2002], 2015 [2009], 2016 [2005])、エクアドル・アマゾン調査地とするフィリップ・デスコラ (秋道 [編] 2018; デスコラ 2016 [2001], 2017 [1996], 2019 [2005])、エドゥアルド・コーン (2016 [2013]) などがよく知られている。デスコラはレヴィ＝ストロースの弟子で、かつてザウデマの本の書評を書いたこともある (Descola 1989)。コーンはサロモンの弟子であるからムラの孫弟子に当たる。ではアマゾンの隣、高文明地帯であるアンデスにおいて存在論的研究はどのように受容され、位置づけられるか。評価はまだ定まっていないが、少しずつ議論は始まっている (Lozada & Tantaleán [eds.] 2019; Swenson 2015)。

また、アルフレッド・メトロ、ライヘル・ドルマトフ、ピエール・クラストル、マイケル・タウシグ、といった人々の業績を、インカ帝国研究と結びつけて

評価する作業も課題として残されている。

さらにアンデス研究者自身のカテゴリーに従って、研究の流れを整理することも1つの方法であろう。アメリカ合衆国ではいわゆる WASP が最上流にいる。これに属する考古学者がどこを調査・研究フィールドとするかという、アメリカ合衆国内、特に南西部である（小谷凱宣 2006私信）。確かにプロテスタントの人々にとって、カトリックの世界であるラテンアメリカは、すこしハードルが高いのかもしれない。それではアンデスをどういった出自の研究者がフィールドとするかという、ヨーロッパ系、アジア系、そしてユダヤ系なのである。アメリカにいるアンデス研究者の多くがユダヤ系である。バーガー、イズベル、シルバーマン、アートンなどが構成する「ペルーの友達 (Amigos del Perú)」というグループがあり、彼らが研究費の配分などを決める立場にいる場合が多いという (Kaulicke 2012私信)。彼らのあいだに理論的共通性があるかどうかを検討する価値はあるであろう。ユダヤ系以外のアンデス研究者であると、アジア系の島田泉、フランシス・ハヤシダ、ジョージ・ラウ、ポーランド系のコラタ、ポソルフスキ夫妻、スロバキア系のジャヌセク、などが思い浮かぶ。アメリカ合衆国の外側、日本、イギリス、ドイツ、フランス、ポーランド、イタリア、ベルギーなど、それぞれの国におけるアンデス研究の特徴を整理し、ペルー国内におけるアンデス研究の特徴を整理する作業も必要であろう。アメリカ合衆国内の研究者と、それ以外の国々の研究者の関係を確認することも有効であろう。

本論文の目的は、インカ帝国を中心としたアンデス研究における理論の系譜を概観し、大きな理論と現場の理論の関係性を整理することであった。アンデス研究は各時代に流行した大きな理論に左右されるよりもむしろ独自のリズムで発展してきた。しかしながらそれをアンデス研究の特殊性として片付けるのではなく、より抽象度を上げ、理論そのものの特性を分解することで、別の整理の仕方が出来るかもしれない。本論は非常に粗い試論であることは承知しているが、今後さらに議論を精緻化していくための見取り図となれば幸いである。

謝辞

本論文の草稿を丁寧にチェックし貴重なコメントをくださった法政大学の芝田幸一郎氏に深謝したい。本論文は南山大学2022年度パッへ研究奨励金 A1-2の研究成果である。

参考文献

(日本語文献)

秋道 智彌 (編)

2018 『交錯する世界 自然と文化の脱構築——フィリップ・デスコラとの対話』京都大学学術出版会。

綾部 真雄

2018 「認識論と存在論」『詳論文化人類学——基本と最新のトピックを深く学ぶ』桑山敬己・綾部真雄 (編)、pp. 330-347、ミネルヴァ書房。

ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド

2015 [2002] 『インディオの気まぐれな魂』近藤宏・里見龍樹 (訳)、水声社。

2015 [2009] 『食人の形而上学——ポスト構造主義的人类学への道』檜垣立哉・山崎吾郎 (訳)、洛北出版。

2016 [2005] 「アメリカ大陸先住民のパーセプティヴィズムと多自然主義」『現代思想』近藤宏 (訳)、44(5): 41-79。

ウィリー、ゴードン & ジェレミー・サブロフ

1979 [1974] 『アメリカ考古学史』小谷凱宣 (訳)、学生社。

ウルフ、エリック

1982 [1957] 「メソアメリカと中部ジャワの閉鎖的農民共同体」『社会人類学リーディングス』松園万亀雄 (編)、合田博子 (訳)、pp. 243-265、アカデミア出版会。

大貫 良夫

1978 「アンデス高地の環境利用——垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』3(4): 709-733。

オング、ウォルター・J

1991 [1982] 『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介 (訳)、藤原書店。

カウリケ、ペーター

2012 「インカにおける生、死、祖先崇拝の概念作用」『インカ帝国——研究のフロンティア』島田泉・篠田謙一 (編)、松本剛 (訳)、pp. 305-319、東海大学出版会。

春日 直樹

2011 「人類学の静かな革命——いわゆる存在論的転換」『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』春日直樹 (編)、pp. 9-31、世界思想社。

川田 順造

2010 「レヴィ=ストロースから学んだもの」『現代思想』38(1): 46-51。

2017 『レヴィ=ストロース論集成』青土社。

クリフォード、ジェイムズ & ジョージ・マーカス (編)

1996 [1986] 『文化を書く』春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子 (訳)、紀伊國屋書店。

- コーン、エドゥアルド
 2016 [2013] 『森は考える——人間的なるものを越えた人類学』奥野克巳・近藤宏（監訳）、近藤社秋・二文字屋脩（訳）、亜紀書房。
- サイード、エドワード・W
 1993 [1978] 『オリエンタリズム』今沢紀子（訳）、上下、平凡社。
- 齋藤 晃
 2004 Duviols, Pierre, *La lutte contre les religions autochtones dans le Pérou colonial: "l'extirpation de l'idolâtrie" entre 1532 et 1660* 『文化人類学文献事典』小松和彦・田中雅一・谷泰・原毅彦・渡辺公三（編）、pp. 520-521、弘文堂。
- 島田 泉・小野 雅弘
 1994 『黄金の都シカンを掘る——古代アンデス』朝日新聞社。
- 清水 展
 2016 「巻き込まれ、応答してゆく人類学——フィールドワークから民族誌へ、そしてその先の長い道の歩き方」『文化人類学』81(3): 391-412。
- デスコラ、フィリップ
 2016 [2001] 「自然の人類学——コレージュ・ド・フランス教授就任講義」『現代思想』矢田部和彦（訳）、44(5): 26-40。
 2017 [1996] 「自然の構築——象徴生態学と社会的実践」『現代思想』難波美芸（訳）、45(4): 27-45。
 2019 [2005] 『自然と文化を越えて』小林徹（訳）、水声社。
- ホブズボウム、E & T・レンジャー（編）
 1992 [1983] 『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他（訳）、紀伊國屋書店。
- ポラニー、カール
 1975 [1944/1957] 『大転換——市場社会の形成と崩壊』吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美（訳）、東洋経済新報社。
- マーカス、ジョージ・E & マイケル・M・J・フィッシャー
 1989 [1986] 『文化批判としての人類学——人間科学における実践的試み』永渕康之（訳）、紀伊國屋書店。
- 松田 素二
 2009 『日常人類学宣言！——生活世界の深層へ/から』世界思想社。
- 宮崎 恒二
 1984 「オランダ構造主義」『文化人類学15の理論』綾部恒雄（編）、pp. 79-94、中公新書。
- 宮崎 恒二・遠藤 央・郷 太郎
 1987 「訳者あとがき」『オランダ構造人類学』P・E・デ＝ヨセリン＝デ＝ヨング他（著）、宮崎恒二ほか（編訳）、pp. 468-488、せりか書房。
- 山本 紀夫
 1980 「中央アンデス南部高地の環境利用——ペルー、クスコ県マルカパタの事例より」『国立民族学博物館研究報告』5(1): 121-189。
- レヴィ＝ストロース、クロード
 1972 [1956] 「双分組織は実在するか」『構造人類学』生松敬三（訳）、pp. 148-179、みすず書房。
 1970 [1962] 『今日のトーテミズム』仲沢紀雄（訳）、みすず書房。
 1979 『構造・神話・労働』大橋保夫（編）、みすず書房。
- レオン＝ポルティエヤ、ミゲル（編）
 1994 [1959/1984] 『インディオの挽歌——アステカから見たメキシコ征服史』山崎慎次（訳）、成文堂。
- ワシュテル、ナタン
 1984 [1971] 『敗者の想像力——インディオのみた新世界征服』小池佑二（訳）、岩波書店。
- 渡部 森哉
 2010 『インカ帝国の成立——先スペイン期アンデスの社会動態と構造』春風社。
 2017 「アンデスの特徴に関する考察」『古代アメリカ』20: 57-78。
- （欧文文献）
 Alberti, Benjamin
 2016 *Archaeologies of Ontology, Annual Review of Anthropology* 45: 163-179.
- Allen, Catherine J.
 2021 *Obituario: R. Tom Zuidema, Revista Histórica* 49: 289-312.
- Bauer, Brian S.
 1992 *The Development of the Inca State*. Austin: University of Texas Press.
- Burger, Richard L.
 2007 *John Howland Rowe (Jun 10, 1918–May 1, 2004), Andean Past* 8: 33-44.
- Castro, Victoria, Carlos Aldunate & Jorge Hidalgo (eds.)
 2000 *Nispa ninchis/decimos diciendo: conversaciones con John Murra*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- Covey, R. Alan
 2006 *How the Incas Built Their Heartland: State Formation and the Innovation of Imperial Strategies in the Sacred Valley, Peru*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Curatola Petrocchi, Marco
 2019 *El estudio del mundo andino en el Seminario Interdisciplinar de Pisac*. In *El estudio del mundo andino*. M. Curatola Petrocchi (ed.), pp. 13-37. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- D'Altroy, Terence N. & Christine A. Hastorf (eds.)
 2001 *Empire and Domestic Economy*. Interdisciplinary Contributions to Archaeology. New York: Kluwer Academic / Plenum Publishers.
- Descola, Philippe
 1989 *La civilisation inca au Cuzco* by R. Tom Zuidema, *Andean Past* 8: 33-44.

- nales. *Histoire, Sciences Sociales* 44(3): 610–612.
- Dillehay, Tom D.
2007 Richard Paul Schaedel (1920–2005), *Andean Past* 8: 45–54.
- Duviols, Pierre
1977 [1971] *La Destrucción de las Religiones Andinas: Conquista y Colonia*. México: Universidad Nacional Autónoma de México.
1979 La dinastía de los Incas: ¿Monarquía o diarquía? Argumentos heurísticos a favor de una tesis estructuralista, *Journal de la Société des Américanistes* 66: 67–83.
1980 Algunas reflexiones acerca de la tesis de la estructura dual del poder incaico, *Histórica* 4(2): 183–196.
1997a La interpretación del dibujo de pachacuti Yamqui. In *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*. T. Bouysse-Cassagne (ed.), pp. 101–114. Paris / Lima: Institut des Hautes Études de l'Amérique Latine Institut Français d'Études Andines.
1997b Respuesta de Pierre Duviols a la crítica de Tom Zuidema. In *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*. T. Bouysse-Cassagne (ed.), pp. 125–148. Paris / Lima: Institut des Hautes Études de l'Amérique Latine / Institut Français d'Études Andines.
- Earle, Timothy
1997 *How Chiefs Come to Power: The Political Economy in Prehistory*. Stanford: Stanford University Press.
- Harris, Olivia
2007 John Victor Murra: antropólogo e historiador de los Andes, *Íconos* 27: 164–166.
- Hirth, Kenneth & Joanne Pillsbury
2013 Redistribution and Markets in Andean South America, *Current Anthropology* 54(5): 642–647.
- Itier, César & Pedro Guibovich Pérez
2018 Un peruanista francés en los Andes: entrevista a Pierre Duviols, *Histórica* 42(2): 155–169.
- Julien, Catherine
2007 John Howland Rowe (1918–2004), *American Anthropologist* 109(4): 796–798.
2000 *Reading Inca History*. Iowa City: University of Iowa Press.
- Kaulicke, Peter
2010 *Las Cronologías del Formativo: 50 Años de Investigaciones Japonesas en Perspectiva. Prólogo de Yoshio Onuki*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Kohn, Eduardo
2015 Anthropology of Ontologies, *Annual Review of Anthropology* 44: 311–327.
- Lane, Kevin
2022 *The Inca*. London: Reaktion Books.
- Lozada, María Cecilia & Henry Tantaleán (eds.)
2019 *Andean Ontologies: New Archaeological Perspectives*. Gainesville: University Press of Florida.
- Marcus, Joyce
1987 *Late Intermediate Occupation at Cerro Azul, Perú: A Preliminary Report*. Ann Arbor: University of Michigan Museum of Anthropology.
- Masuda, Shozo, Izumi Shimada & Craig Morris (eds.)
1985 *Andean Ecology and Civilization*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Menzel, Dorothy
1964 Style and Time in the Middle Horizon, *Ñawpa Pacha* 2: 1–105.
- Moseley, Michael E. & Kent C. Day (eds.)
1982 *Chan Chan: Andean Desert City*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Murra, John V.
1972 El “control vertical” de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*. J. V. Murra (ed.), pp. 429–476. Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán.
1975 *Formaciones Económicas y Políticas del Mundo Andino*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
1980 [1956] *The Economic Organization of the Inka State*. Greenwich: JAI Press.
2002 *El Mundo Andino: Población, Medio Ambiente y Economía*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú / Instituto de Estudios Peruanos.
2017 [1969] *Reciprocity and Redistribution in Andean Civilizations: Transcript of the Lewis Henry Morgan Lectures at the University of Rochester April 8th – 17th, 1969*. Chicago: Hau Books.
- Murra, John V. & John H. Rowe
1984 An Interview with John V. Murra, *Hispanic American Historical Review* 64(4): 633–653.
- Nash, June
1979 *We Eat the Mines and the Mines Eat Us: Dependency and Exploitation in Bolivian Tin Mines*. New York: Columbia University Press.
- Nowack, Kerstin
1998 *Ceque and More: A Critical Assessment of R. Tom Zuidema's Studies on the Inca*. Markt Schwaben: Verlag Anton Sauerwein.
- Pärssinen, Martti
1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization*. Helsinki: Societas Historica Finlandiae.
- Rice, Don S., Charles Stanish & Phillip R. Scarr (eds.)
1989 *Ecology, Settlement and History in the Osmore Drainage, Peru*. BAR International Series 545. Oxford: Brit-

- ish Archaeological Reports.
- Rowe, John Howland
- 1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In *Handbook of South American Indians, Vol. 2*. J. H. Steward (ed.), pp. 183–330. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- 1957 The Incas under Spanish Colonial Institutions, *Hispanic American Historical Review* 37(2): 155–199.
- 1961 Stratigraphy and Seriation, *American Antiquity* 26(3): 324–330.
- 1994 La supuesta “diarquía” de los Incas, *Revista del Instituto Americano de Arte del Cuzco* 14: 99–107.
- 2003 *Los incas del Cuzco: siglos XVI–XVII–XVIII*. Cuzco: Instituto Nacional de Cultura – Región Cuzco.
- Rowe, John H. & Patricia J. Lyon
- 2010 On the History of the Nasca Sequence, *Ñawpa Pacha* 30(2): 231–242.
- Salomon, Frank
- 2007 John Victor Murra (1916–2006), *American Anthropologist* 109(4): 792–796.
- Schreiber, Katharina
- 2006 John Howland Rowe 1918–2004, *Ñawpa Pacha* 28(1): 195–201.
- Stanish, Charles
- 2003 *Ancient Titicaca: The Evolution of Complex Society in Southern Peru and Northern Bolivia*. Berkeley: University of California Press.
- Swenson, Edward R.
- 2015 The Materialities of Place Making in the Ancient Andes: A Critical Appraisal of the Ontological Turn on Archaeological Interpretation, *Journal of Archaeological Method and Theory* 22: 677–712.
- Urton, Gary
- 1996 R. Tom Zuidema, Dutch Structuralism, and the Application of the “Leiden Orientation” to Andean Studies, *Journal of the Steward Anthropological Society* 24(1–2): 1–36.
- van Deusen, Nancy E.
- 2000 An Interview with María Rostworowski, *Colonial Latin American Review* 9(2): 263–275.
- Wachtel, Nathan
- 1981 Reciprocity and the Inca State: From Karl Polanyi to John V. Murra. In *Research in Economic Anthropology* 4. pp. 38–50. Greenwich, Connecticut: JAI Press.
- Willey, Gordon R.
- 1953 *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- Wolf, Eric R.
- 1959 *Sons of the Shaking Earth: The People of Mexico and Guatemala-Their Land, History, and Culture*. Chicago: University of Chicago Press.
- 1982 *Europe and the People without History*. Berkeley: University of California Press.
- Zuidema, R. Tom
- 1964 *The Ceque System of Cuzco: The Social Organization of the Capital of the Inca*. Leiden: E. J. Brill.
- 1989 *Reyes y Guerreros: Ensayos de Cultura Andina*. Lima: FOMCIENCIAS.
- 1997a Pachacuti Yamqui Andino: Respuesta de Tom Zuidema a Pierre Duviols. In *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*. T. Bouysse-Cassagne (ed.), pp. 115–123. Paris / Lima: Institut des Hautes Études de l’Amérique Latine / Institut Français d’Études Andines.
- 1997b Segunda respuesta de Tom Zuidema a Pierre Duviols. In *Saberes y Memorias en los Andes: In Memoriam Thierry Saignes*. T. Bouysse-Cassagne (ed.), pp. 149–154. Paris / Lima: Institut des Hautes Études de l’Amérique Latine / Institut Français d’Études Andines.
- 2011 *El Calendario Inca: Tiempo y Espacio en la Organización Ritual del Cuzco. La Idea del Pasado*. Lima: Fondo Editorial del Congreso del Perú, Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 2015 *Códigos del tiempo: espacios rituales en el mundo andino*. Lima: Apus Graph Ediciones.

Theories and Schools of Andean Studies

Shinya WATANABE*

This paper discusses the relationship between general theories and local theories based on the Andean studies of South America. It focuses on the theories and schools of the studies of the Inca Empire, which is the core of Andean studies. The studies of the Inca Empire, which was conquered in the 16th century, is central to Andean studies. Ethnohistorical analysis of Spanish documents and archaeological studies, in addition to the ethnographical studies, are principal methods for understanding the Inca Empire. Andean studies have not produced any general theories that could be applied to case studies of other regions. Conversely, Andean studies were quite removed from contemporary popular theories, such as cultural evolution, processual archaeology, structural anthropology pioneered by Levi-Strauss, and economic anthropology influenced by the studies of Karl Polanyi. Andean studies tended to rely on local theories and emphasize their characteristics (“lo andino”). John H. Rowe, R. Tom Zuidema, and John V. Murra were key players in the studies of the Inca Empire, and they trained many scholars. This article classifies Andean scholars according to the various schools in order to provide an overview of the history of Andean studies. It is reasonable to assume that Andean studies developed independently and locally, separately from the 20th centuries’ general theories.

Keywords

Andes, Inca, ethnohistory, archaeology

* Nanzan University